

---

 その他 (論説)
 

---

順天堂大学保健看護学部 順天堂保健看護研究 10  
P.27-34 (2022)

## 両親の諍いが子どもに及ぼす影響 —小説『死の棘』の家族をめぐる発達心理学的考察—

### The Influence of a Quarrel of Parents on Their Children's Development : An Analysis of a Family in the Novel "The Thorn of the Death" from Viewpoint of Developmental Psychology

山 岸 明 子 \*  
YAMAGISHI Akiko

#### 要 旨

島尾敏雄の私小説『死の棘』をめぐる、敏雄とその妻ミホの諍いが子どもたちの発達にどのような影響を与えたのか、その影響の仕方にどのような要因が関与したのかの検討を発達心理学の観点から行った。両親の常軌を逸した激しい諍いが長期間続くという状況は、当時6歳と4歳だった子どもたちに混乱や不安をもたらしたが、退行や不適切な行動等の大きな問題行動はほとんど見られなかった。その理由として、1) それまで十分に愛され、安定した状況で健全な発達をしていた。2) 両親は異様な行動をするが、親身な世話もしてくれ、騒ぎが収まれば優しい元の母親、父親に戻るという見通しや希望がもてた。3) 家族が孤立しておらず、様々な人とのかかわりやサポートがあったという要因があげられた。苛酷な状況であっても防御要因があれば悪影響はある程度弱めることができる可能性が示された。

索引用語：両親の諍い、問題行動、防御要因、発達心理学

Key words : A quarrel of parents, Problem behavior, Protective factor, Developmental psychology

#### 1. はじめに

子どもにとって家庭がどのようなもので、どのように育てられるかは発達上の重要な問題である。非常に未熟な状態で生まれてくる人間の子どもは、生きていくために大人に養ってもらわなければならないことが必須であり、家庭という場で持続的なケアを受ける中で発達していく。乳児期の子どもは養育者（多くの場合は母親）とのつ

ながりを作ることが最大の発達課題であり、母親が子どもの要求や呼びかけに応じてくれて、母子の相互作用がうまく成立すると、基本的信頼 (Erikson)<sup>1)</sup> が獲得され、また母親への愛着 (Bowlby)<sup>2)</sup> が形成される。そして母親への信頼や愛着ができると、それらが他者や世界に対する安心感につながり、更に自分は他者・世界に応じてもらえるという自信・安定感ももたれ、それが発達の基盤になるとされる。

Bowlbyの伝統的な愛着理論では<sup>2)</sup>、そのように母子関係によって安心感・安定感ももたれるとされるが、夫婦間の問題が子どもに与える影響に関する最近の理

\* (元) 順天堂大学

\* (former) Juntendo University

論では、情緒的安定性は母親との関係だけでなく、両親間の関係からも導かれるとする情緒的安定性仮説が提唱されている<sup>3)</sup>。両親間の関係や家庭全体の雰囲気は親の子どもへの対し方を規定するものとして、また世界がどのようなものであるかを子どもに示すものとしても重要であると考えられる。

両親が不仲であることの子どもへの影響については多くの研究がなされており（例えば Schaffer<sup>4)</sup>, Cummings, Davis & Campbell<sup>5)</sup>）、子どもに不安を与え適応上の様々な弊害を与えることが報告されている。発達精神病理学では、問題行動は 1) 攻撃や反社会的行動等、環境との軋轢を引き起こす外在化型問題行動、2) 過度の不安や恐怖、抑うつ等、自己の内部に問題をもつ内在化型問題行動に分類されるが<sup>6)</sup>、両親の不和は外在化型と内在化型の両方を引き起こすこと、また直接的な影響だけでなく長期的な影響も引き起こすことが指摘されている<sup>5)</sup>。特に身体的な攻撃や激しい喧嘩は幼少期の子どもにもわかり、表面に現れない不和はわかりにくい一方、他者が怒りを表出すると幼少の子どもでも動揺することが示されている<sup>7)</sup>。

そして不和の深刻さや頻度、持続性が弊害の程度と関連するとされている<sup>8)</sup>。敏感化仮説によれば、夫婦間葛藤が繰り返される場合、子どもは馴れるというのではなく、閾値が低下して更に敏感になり、夫婦間葛藤が持続することはネガティブな影響をより深刻にするとされる。その一方で、子どもへの影響は両親が葛藤・不和にどう対処するかが重要で、葛藤が解決されることは子どもの苦悩や否定的反応を減らすことも示されている<sup>9)</sup>。

激しい不和が長く続けば、悪影響は大きくなると考えられるが、そのようなケースとして本稿では島尾敏雄の小説『死の棘』<sup>10)</sup>を取り上げる。『死の棘』は、夫の浮気を知って嫉妬に狂い執拗に彼を問い詰め、攻撃する妻ミホとの葛藤と苦しみに満ちた日々を、夫の敏雄が綿密に綴った私小説である<注1>。二人の諍

いがどのようなもので、彼らはどのように振る舞い何を言ったのか、その時に二人の子ども（当時6歳と4歳）はどのような反応をしたのかが詳細に描かれている。それは心理学の研究法による資料ではないが、人間の心や人間の本質について深い洞察をもつ作家による語りを一つの事例として分析することは可能であり、両親のどのような言動が子どもにどのような影響を与え、そこにどのような要因が関与していたのかに関して見えてくるものがあると考えられる。

『死の棘』を読んだ者は、いつまでも繰り返される二人の諍いに辟易としながらも引き込まれ、また両親の日々の行動が子どもたちに悪影響を及ぼしたのではないかと、二人はその後どうなったのかという危惧の念を抱くと思われる。しかし島尾敏雄に関する研究や評論は、夫婦の問題や彼の贖罪意識等についてのもものが多く、子どもの発達への影響に焦点化したものは見られない。

本稿では、『死の棘』および『死の棘日記』<sup>11)</sup><注2>に書かれているミホの錯乱とその後の混乱時代の両親と子どもたちの言動の記述に基づいて、時にミホへのインタビュー等も含めて島尾夫妻について詳しく論じられた評論<sup>12)</sup>等も参考にしながら、両親のあり方が彼らにどのような影響を与えたのか、影響の重大性に関与した要因は何かについて、発達心理学の知見を参照しながら検討する。なお『死の棘』『死の棘日記』は引用箇所が多いため表記せず、それ以外については引用文献の番号を付した。

## II. ミホの錯乱とその状況下での子どもたち

奄美大島で育ち小学校の教師をしていたミホは、特攻隊長として島に赴任した島尾敏雄と恋に落ち、出撃が決まった敏雄の後を追って自死するつもりであったが、敏雄の出撃は中止となり、終戦を迎える。敏雄はミホに結婚を申し込んで本土に戻り、ミホは敏雄を追って神戸に行き、二人の結婚生活が始まる。死

を覚悟していた敏雄は日常的な生活になじめず、ミホも島民に慕われる素晴らしい「隊長さま」とは異なる敏雄に落胆し、共に不本意な日々を送るが、やがて敏雄は文学仲間である女性と不倫をし、外泊を繰り返すようになる。ミホはそれに気づくが、何も言わずにじっと耐え、二人の子ども（長男の伸三<注3>と長女のマヤ）を育てていた。

昭和29年9月、敏雄の机に開かれた日記帳が置いてあり、それを見たミホは錯乱状態に陥る（「けものになって、よつんばいになって部屋をかけた」とミホは語ったとある<sup>12)</sup>）。おとなしくて自制心のあった彼女は豹変し、帰宅した敏雄を厳しく糾弾して、三日三晩不眠不休で取り調べが行われる。その後もミホは夫の不倫についてすべてを知ろうとして、関連することに気づいたり思いついたりすると、荒れて詮索し、それだけでなく敏雄を激しく問い詰め、罵り、時に足蹴にする等の暴力をふるい、それが執拗に続く内に、敏雄もミホの発作に逆上して大声で騒いだり「自殺する」と言いながら逃げ出したりするようになる。

そのような両親の異常な言動に直面した伸三とマヤは、その場を離れて外に行き、戻ってきて親たちの険悪な様子を見るとまた出て行くというような行動をしたり（食事もできない時はお金を渡されて二人で食べている）、じっと親の様子を見ていたりする。あるいは「お父さんが逃げるよ」とミホに起こされた二人は、「髪を振り乱しつかみ合う親たちを見ると、怯えた目つきで一緒に大声で泣きだした」というような反応もしている。

両親の常軌を逸した激しい争いは延々と続き、ミホは食事中に突然荒れて食器を投げたりし、家族は緊張に満ちた苛酷な状況に置かれる。しかし彼女はいつも陰悪なわけではなく、今まで通りのやさしい穏やかな母親・妻にもどることもあり<sup>12)</sup>、敏雄が子どもたちの面倒をみ、仕事に行くときは親戚に三人を預けていくという生活をしていた。

二人は泣いている母親が出ていくのではないかと心配し、特に伸三は何とか止めようと必死で頑張っている（逃げ出そうとする両親を捕まえて離さない、首を吊ろうとする父親に「あぶないよ」と言ってミホに知らせに行く、「お父さん、僕、本気でお願いするよ」と何度も頼むというように）。一方で何がきっかけで発作が起こり、何がきっかけで収まるのかわからないため、二人は途方にくれた諦めた顔つきで静かにして、発作が終わるのを待つだけであった。伸三は言っている。「もういろんなことを見てしまったから仕方がない。生きていたってしょうがないから、お母さんの言う通り、お母さんと一緒に行つて、お母さんが死のうと言えれば一緒に死ぬよ」。自分ではどうしようもないという諦めと、そういう状況でも親を信じ従おうという気持ちが窺える。

冬には敏雄の故郷の相馬に行ったりするがミホの状態はよくなり、ミホは慶応病院で受診し、入院する。退院後引越しをするが、そこに敏雄の愛人が来たことから病状が悪化し、子どもたちはミホの従妹の下宿で暮らすようになる。6月にミホと敏雄は別の病院（国府台病院）に二人で入院し、その後子どもたちはミホの従妹に連れられて、両親から離れて遠い奄美大島に行くことになる。

二人は親元を離れて全く知らない土地に行くことになるが、それは子どもにとっては大変なことであり、知っている人も東京でしばらく同居して世話をしてもらったミホの従妹だけである。それにもかかわらず適応は比較的スムーズだったようで、4ヶ月後に敏雄とミホが会った時には島の言葉を話し、アヤさま（二人を預かってくれたミホの母方の叔母）になつている様子であった。但し二人共瘦せて目がぎょろついでいて、伸三は喘息の症状、マヤにはひどい吹き出物ができており健康状態はよくなかったが、ミホの親戚（特にアヤさま夫婦）のサポートを得て、寂しい思いをしながらも大きな問題もなく過ごしていたと思われる。

両親が島にくと、敏雄一家はアヤさまの敷地内の離れに住み、アヤさまの助けを借りながら生活を始める。ミホは憂鬱だったり不機嫌になることもしばしばあったが、アヤさまに宥められて騒ぎにならずにすんでいた。アヤさまや他の親戚から道具的にも情緒的にも大きなサポートを得ることで、子どもたちにとって状況は以前よりはよくなっていったといえる。しかし11月にミホが発作を起こし以前と同様の騒ぎになり、その後もしょっちゅう発作をおこし、それは日記の終わりの12月の末まで続いている。その度にアヤさまが出勤して何とか宥めているが、ミホの状態はまだ不安定であったようである。

### III. 両親の言動の子どもたちへの影響

両親の常軌を逸した言い争い、異様な振る舞いは、子どもに大きな影響をもたらしたことが予想される。まだ6歳と4歳である二人にとって両親は絶対的に必要なため、両親の激しい諍いは二人の安定感を脅かすし、精神分析学者 Bowlby が言うように<sup>2)</sup> 愛着対象のそばにいたいという欲求は生得的な基本的欲求であり、親がいなくなるのではないか、死んでしまうのではないかという不安は子どもにとって最大級の不安だと思われる。IIでも述べたが、二人は脅かされて内在化型問題行動を示し、「僕、楽しいことなんかもうなくなっちゃった。楽しくても心から笑えないんだ」(伸三)、「心配で眠れない。(父の「心配しなくていいから、ぐっすりお休み」)に対して、にこりともしないで)私だって考えているんだから」(マヤ)というように、うつ気分や不眠を訴えたりしている。

敏雄は、自分たちの諍いが彼らに悪影響を与えているのではないかと危惧し、そのことについてしばしば記述している。伸三とマヤの心が荒んでしまうと言うことを聞かない場面や、敏雄と二人の関係が悪くなり徐々に心が離れていくことが様々な所で書かれている。例えば慶応病院受診の日、電車の中でミホはお

かしくなり、また病院でも長時間待たされ、その後大勢の実習生の前で診察を受け、興奮して電気ショックにかけられるというように強い緊張が続いた日であったが、子どもたちは落ち着かずに動きまわり、わざと人の邪魔になるようないたずらをしたりした。敏雄は彼らはミホの毒気を感じ、わざと周りを見せてつけている、親の言いつけを素直に聞いていたのに、もうそうではなくなった、親たちの愚かな行為を冷たい目つきで見ている等、心配し傷ついている。

敏雄との関係についても、12月には既に「伸三が白い目を向けるようになった」「マヤはいつも怯え、怪我をしても親に言わない」ことが書かれ、その後も「伸三が父親を少しも恐れなくなった、白い目で見ると」いうことがしばしば書かれ、また言うことを聞かない伸三に体罰を加えた敏雄に、伸三は敵愾心を剥き出しにしたとある。

但し敏雄との関係が悪くなったのは、この時期ではないように思われる。ストレスが多い状況で、対立やめごとがあるのは当然であり、子どもが不適切な行動をして親に怒られるのはどの家庭にもあることである。親に怒られた時には不機嫌になったり悪態をつくこともよくあり、それは親への信頼を失い、親を恐れなくなったということではないだろう。慶応病院での受診時のことも、ミホの具合が悪くて過度に緊張を強いられて、いつも我慢している分エスカレートしてしまっただけであり、必ずしも大きな問題ではないと思われる。

そして感情がこじれた後も子どもたちとの温かい感情のやりとりはあり、例えば上述の受診の3日後にミホは入院するが、その夜寝床で父親を気遣う伸三を敏雄が抱き寄せて、その両足を股にはさむと、伸三は「お母さんと寝た時もそうしたよ」と秘密を打ち明けるように言ったとある。敏雄が描いた敵対的な伸三には、自分たちの諍いが子どもたちに悪影響を与えていることへの危惧感の投影があるように思われる。



非常に苛酷な状況に置かれているにもかかわらず、伸三とマヤは意外に大きな問題を見せず、外在化型問題行動を示すことはなかったようである。彼らは荒れたり退行するというような不適応行動をすることもなく、状況をしっかり見て、状況に応じた行動をとっている。そして子どもながらに、問題が大きくなるように父親に協力し、時に親にまともな行動をするように頼んだりし、更に親を気遣い、慰めたり励ましたりもしている（「お父さん、元気だしなさい」「お父さん、小説書いて疲れたら、ぼうや（＝僕）を起こしなさい。肩をたたいてやるよ」）。そのような言動は、伸三のやさしさの現れでもあるが、愛情に不安のある子に時に見られる、親を労り世話をやくような行動（内的作業モデル<注4>のアンビバレント型に見られる「役割逆転」<sup>2)</sup>とも考えられる。そのような意味では全く問題がないというわけではないし、無理を重ねていると思われるが、一方で彼らが両親の気持ちを和ませ支えているのも確かである。二人は幼少であるにもかかわらず、破滅的な状況によく対処し、内在化型問題行動はある程度見られたものの、外在化型問題行動を示すことはなかったといえる。

#### IV. 悪影響がそれ程大きくなかった理由

両親の常軌を逸した激しい諍いに曝され、親が自殺したり逃げ出す可能性もあり、しかもそれが延々と続くという苛酷な状況に置かれていたにもかかわらず、伸三とマヤは内在化型問題行動はいくらかあったものの、外在化型問題行動や大きな問題は見せなかったということをⅢで述べた。なぜ彼らは大きな問題をもたずにすんだのか。その理由として以下のことが考えられる。

##### 1. それまで十分に愛され、安定した状況で健全な発達をしていた

ミホはそれまでの10年間つらい状況にあって、必ずしも心理的に安定していたわけではなかったが、そ

のことを表に出さず、よい母親だったのだろう。養父母からの愛を一身に受けて育ったミホ<sup>12)</sup>は、子どもを愛し適切に応じる能力をもっていて、子ども二人は健全な自我を発達させていたと思われる。敏雄は家庭を省みず「よい父親」ではなかったが、ミホはそのことを子どもたちには言わず「よい父親」として話していて、父性も母性も適切に機能していたと思われる。親が逃げようとしたら「死ぬ」と言ったりすれば、子どもたちも不安に思い阻止するが、それは親同士の問題であり、「自分が愛されていないから捨てられる」というような愛着上の不安をもつわけではない。精神分析学者 Erikson<sup>1)</sup>の言う「基本的信頼」をもち、親や世界、自分への信頼をしっかり持ち続けているように思われる。彼らには「自立性・自律性」や「積極性」もあり（事件前にも、敏雄の行動を探りに出かけたミホが真夜中になっても帰ってこない時、二人で寝間着のまままで駅まで迎えに行き、石けりをして遊んでいたというエピソードもある）、混乱した状況で、親に頼らないでどうしたらいいのかを子どもなりに考えながら、（まだまだ親の庇護が必要な時期であるのに）何とか日々の生活を送っている。両親が異常な行動をしていることで、周りからいじめられることも多かったと考えられるが、そのような困難にも自分達で対処している（伸三は直接戦い、マヤは「ほらね、うちのお父さんは気狂いなんだよ」とむしろ得意そうに友達に言ったり、たたかれても泣かず「私の母さん、強いんだから」と言ったりしている）。

ミホの状態をよく見て、それに合わせて行動するためには、自己統制力が必要だが、（時々言うことを聞かないこともあるものの）彼らはそれを持っているし、相手の気持ちや状況を理解する能力はこの年齢に不釣り合いなほど高く<注5>、社会性の発達は著しい。前述のように時に両親に対する優しい気遣いを示すが、これは子どもや夫に対するミホの優しい言動を見てきたことにも由来すると考えられる（ミ

ホは荒れ狂った後、敏雄を優しく宥めたり、自分のベッドを彼に譲ったりもするのである。

## 2. 両親は異様な行動をするが、それは自分達に向けられたものではないし、やがて終わって優しい元の母親、父親に戻る

夫婦間に問題がおこると子どもの養育が疎かになったり、子どもに対する攻撃性が増すことが報告されているが<sup>4)</sup>、敏雄とミホの場合はひどい状況の時には養育が不十分になるものの、敏雄がそれなりに世話をしており、攻撃が子どもに向けられることもほとんどない。そしてどんなにひどい諍いになっても、ミホは攻撃した後で敏雄に謝り、優しい以前のミホになり、二人は睦まじくすらなる。伸三は「気狂いになった時、お父さんもお母さんも気狂いの様じゃなかった。子どもを置いて、向こうの部屋に行ってすぐに仲直りするのね。カナシャ（＝頬ずり）なんかして」と言っている。ひどい喧嘩をしても二人は愛し合っているのだという安心感、どんなにひどい状況になっても、必ずもとに戻るという見通しを彼らはもてるのである。ミホは時々子どもにも謝り、以前のようなお母さんになると言ったりもしている。

両親の諍いは子どもに悪影響を及ぼすが、但しその後仲直りすれば、悪影響は弱まるという研究も報告されている<注6>。いつ、どのようなきっかけで発作が起こりそれが収まるのかわからないという状況はストレスフルだが、どんなにひどくてもその内仲直りすると思えることは希望をもたらす。

## 3. 家族が孤立しておらず、様々な人とのかかわりがある

島尾家には親戚や仕事上かかわりのある人がよく訪れている。他人がいるとミホは発作をおこさないため、誰かが訪問すると、安心して気を遣わないでいられるという意味で、敏雄にも子どもたちにとっても他者の訪問は重要であった。敏雄が仕事の時も、三人で親戚の家で待っているという生活で、他者とのかかわ

りは多かった。親に代わる愛着対象になるということではないが、普通の空気をもちこんでくれ、親身になってサポートもしてくれる。その後二人はミホの従妹に連れられて、両親から離れて遠い奄美大島に行くことになるが、両親以外の大人とのかかわりが多かった二人は不安感を示すこともなかった。

そして奄美大島ではアヤさまの家に住んで世話をしてもらい、他の親戚とも一緒に大勢で食事をし、楽しい時をすごしたようである。特にマヤはアヤさまによくつき、新たな愛着対象を得たようである（敏雄は「マヤは初めておばあさんの味を知る」と書いている）。

苛酷な状況に置かれながらも、二人が何とかそれなりに対処できたのは、上記のような外的、内的なプラス要因―防御要因があったからだと言えよう。

## V. 家族のその後

9月の事件から次の年の12月末日まで、『死の棘』に書かれた1年3か月の経過について述べてきた。『死の棘』はミホがまだ不安定な状態のままで終わっているが、その後徐々に症状は沈静化していったようである。島尾家のその後については、文芸評論家の山本健吉が『死の棘』の解説で次のように書いている<sup>13)</sup>。「(島尾敏雄が『死の棘』を書いたのは)夫人の病はすでに過去のことであり、回癒した夫人の魂を、ふたたび騒立つことのないように、静かに見守り、またいたわり合いながら、敬虔に贖罪の生活を送っていた時である。するとこの、一見暗く、厳しくすさまじい世界は、反対に明るく、回癒と甦りへの感謝と、愛と勝利への讃歌に満ちているのだというべきであろう」。また島尾敏雄の短編<sup>14)・15)</sup>でも、その後は揉めることのない平穏な日々になったことが書かれている。一方で、夫婦の関係性はミホが支配し敏雄はそれに絶対服従するという関係になっており、『死の棘』時代とは異なった問題が生じていたことも窺える。このことについ

ては、稿を改めて述べようと思う。

## VI. おわりに

島尾敏雄の私小説『死の棘』をめぐって、両親の諍いが子どもたちの発達にどのような影響を与えたのか、その影響の仕方にどのような要因が関与しているのかに関する検討を行った。その結果、両親の激しい諍いが続くという苛酷な状況にあっても、適切な防御要因があれば悪影響はある程度弱められることが論じられた。

コロナ禍で社会や家族のあり方が変化し、家族と過ごす時間が増え、そして家族が孤立しがちな昨今、親のネガティブな影響が出やすいことが危惧されているが、本稿が少しでも参考になればよいと考える。

## 注

<注1> 島尾敏雄はこの小説によって読売文学大賞や日本文学大賞等を受賞し、芸術院会員にもなって、彼の代表作となった。

<注2> 『死の棘日記』は敏雄が実際に書いていた日記で、事件の翌日から『死の棘』に書かれていることが日にち別に書かれ、奄美大島移住後の12月末日まで書かれている。

<注3> 『死の棘』では「伸一」と表記されている。

<注4> Bowlbyは<sup>2)</sup>、幼児は特定の他者に愛着を向け安心感を得るが、それは内的表象として内面化され、「他者は自分を受け入れてくれるか、自分は他者に受け入れられる存在なのか」に関する枠組み（内的作業モデル）になるとした。

<注5> Selman<sup>16)</sup>によれば、幼少期には自分の視点と他者の視点を分化させることができず、相手の立場や気持ちを相手の視点から理解することはむずかしい。

<注6> 夫婦の喧嘩とその後の経過をビデオで子どもに見せ、夫婦の怒りの程度や自分の中に生じた情

動反応を評定させると、解決群は未解決群よりも、夫婦の怒りを弱く評定し自分も怒りや恐れをあまり感じないという結果であった<sup>9)</sup>。

## 引用文献

- 1) Erikson, E.H. : *Childhood and Society* (2nd ed.), 1963. 仁科弥生訳, 幼児期と社会, みすず書房, 東京, 1973.
- 2) Bowlby, J. : *Attachment and Loss, Vol.2 Separation : Anxiety and Anger*, 1973. 黒田実郎・岡田洋子・吉田恒子訳, 母子関係の理論II : 分離不安, 岩崎学術出版社, 1977.
- 3) Davis, P.T., & Cummings, E.M. : *Marital conflict and child adjustment : An emotional security hypothesis. Psychological Bulletin*, 116, 387-411, 1994.
- 4) Schaffer, H.R. : *Making Decisions about Children* (2nd ed.), 1998. 無藤隆・佐藤恵理子訳, 子どもの発達に心理学がいえること—発達と家族環境2版, 新曜社, 2001.
- 5) Cummings, E.M., Davis, P.T., & Campbell, S.B. : *Developmental Psychopathology and Family Process*, 2002. 菅原ますみ監訳, 発達精神病理学 : 子どもの精神病理の発達と家族関係, ミネルヴァ書房, 2006.
- 6) 菅原ますみ : 個性はどう育つか, 大修館書店, 2003.
- 7) Cummings, E.M., Zahn-Waxler, C., & Radke-Yarrow, M. : *Young children's responses to expression of anger and affection by others in the family, Child Development*, 52, 1274-82, 1981.
- 8) Jenkins, J.M., & Smith, M.A. : *Marital disharmony and children's behavior problems : Aspects of a poor marriage that affect children adversely, Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 32, 793-810, 1991.
- 9) Cummings, E.M., Ballard, M., El-Sheikh, M., & Lake, M. : *Resolution and children's responses to interadult anger, Developmental Psychology*, 462-

470,1991.

- 10) 島尾敏雄：死の棘，新潮社，1977/1981.
- 11) 島尾敏雄：死の棘日記，新潮社，2002/2008.
- 12) 梯久美子：狂うひと―「死の棘」の妻・島尾ミホ，新潮社，2016.
- 13) 山本健吉：解説，島尾敏雄，死の棘，新潮社，1981.
- 14) 島尾伸三：妻への祈り・補遺，妻への祈り―島尾敏雄作品集，中央公論社，1958/2016.
- 15) 島尾敏雄：日の移ろい，妻への祈り―島尾敏雄作品集，中央公論社，1958/2016.
- 16) 日本道徳性心理学研究会：道徳性心理学―道徳教育のための心理学，北大路書房，1992.